
バレンタインデーラブソデー

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインデーラップソード

【NZコード】

N5814D

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

2月14日は女の子の一大イベント！学校中の女子に大人気のサッカー部の王子様と、やっぱり彼が大好きな3人のクラスメート。笑いと涙の友情物語。

第1ハーフ（前書き）

これは軽いノメトリーです。

第1ハーフ

うちの高校は生徒に対してもフレンドリーで、2月14日のバレンタインデーは生徒たち（教師も含む？）の一大イベントになつている。

その一大狂詩曲の中心にいるのが我が2年A組の菊池瞬（きくちしゅん）君だ。もてない男が何をブートレようが今年の主役は彼に決定！ なんてつたつて我が校の、ほどほどに強い、サッカー部のエースストライカーなのだ！ ルックスだってキュートで美的で王子様なのだ！

そんな彼に恋しない女子はいない！ ・・わたしだって・・・

昼休みである。

「あ～、女子諸君！ わたしはサッカー部前主将3年B組近藤勇一である。菊池瞬君へのチョコレートのプレゼントは我がサッカー部が一括管理させていただぐく」

え～～！？と女子たちから不満の声が上がる。昼休みになつて3年生のごつい先輩たちがドカドカ教室に入つてきて何事かと思つたらさつさと瞬君の腕を掴んで廊下に連れ出した。キャラーッ、何いつ！？と思つたら机と椅子まで運び出されて、瞬君を座らせると前主将さんのゴリラさん（失礼！）が演説を始めた。クラスの女子はもちろん、瞬君にチョコを渡そうと集まつてきた他のクラスの女子たちもいつせいに「ええ～～！？」と不満の声を上げたのだった。
「えーい、うるさいうるさい、メス犬ども、もとい、女子諸君。考へてもみたまえ、君たちの渡すチョコレートを愛しい瞬君が全部食べられると思うかね？」

女子たちは手に持つた包みを胸に抱いて女の子同士顔を見合せた。

「どうう～、んなことしたら愛しの瞬君がまるまる太った豚足王子

になつてしまつや」

主将「コリラはわつはつはつはと一人で大笑いした。

「まあ、ぶつちやけ、大半のチョコレートは、俺たちサッカー部員の腹んなかに収まつて激しい練習のエネルギーになるわけだ」

再びええへつ！と抗議の声が上がつた。

「つるさいうるさい！だから、さ、俺たちが部でちゃんと管理して、君たちからプレゼントされたチョコレートは必ず一切れは菊池君の口に入るようにする。残りは順次練習後部員で分けて食させていただく。な？その方が平等でいいだろう？」

じつい顔に笑いかけられ、2年の女子たちはうなずくしかない。

まあ、平等ということでは文句も言えない。暇な前主将は上機嫌に笑つて言った。

「じゃあ一列に並んでくれ。これより菊池瞬君へのチョコレートプレゼントの手渡し会及び握手会を開催しまーす！ささ、時間は限られているぞおー、菊池君にチョコを渡したい女子は速やかに列に並びたまえー！…！」

みんなしようがなく一列に並び、思いがけず近くにいて列の先頭になつた隣のクラスの女子はリボンの付いたピンクのチェックの紙袋を瞬君に渡し、「握手をどうぞ」と笑顔の前主将に言われて握手をし、「キャツ」と真つ赤になつた。おーおー、幸せそうに笑顔をとろけさせちゃつて。

「はい、次の方どうぞー」

「あ、あの、応援します。頑張つてください・・・」

「ありがとう・・・」

チョコを手渡して握手。キャツ。チョコレートの袋はサッカー部員が受け取つてできぱき大きなエコバッグに詰めていく。

「はい次の方ー」

「お、応援します！ キャツ」

「ありがと・・・」

サッカー部が仕切つているものだからみんな「応援します」に

なつちやつてる。女の子はみんな嬉しそうに頬を染めて、瞬君も頬を染めて実に恥ずかしそうに握手をしている。

ゴリラ主将は列に向かつて言った。

「我がサッカー部は来週の宿敵上南高校との練習試合を控えて猛練習のまつただ中だ！ 放課後は20分しか時間を取りないから菊池にチョコ渡したい女子はちゃんと列に並んでくれー！」

あまりに長い列に様子を見に来た女子がチラホラ見える。
列はずら～～っと、B棟2階の廊下を端まで延び、さらに階段を下つて1階に伸び、さらにさらにA棟への渡り廊下へ伸びている。その列をサッカー部員が総動員で整理している。

報告を聞いてゴリラ主将は

「う～む、やはり整理券を配らなくてはならないか。よし、渡り廊下から先は配布開始！」

と、指示を出した。しつかりと準備をしている。だいじょうぶか、受験生！？（それとももう大学決まつて暇なのか？）

しつかし渡り廊下から先つて、全校の女子生徒が瞬君にチョコを渡すのか？

しばらく順調に進んでいたプレゼント＆握手会にトラブル発生。
3年生の女子たちがやつてきて列を無視して直接瞬君にチョコをプレゼントしようとしたのだ。

「瞬くん、お姉さんの愛を受け取つてえ（ハートマーク）」

「こりこりあ、列に並ばんかい」

当然ゴリラさんが注意する。

「なによお、あんた馬鹿？ 受験のまつただ中の3年にそんな暇あるわけないでしょー？」

「もつとも。

「つっせーな。スポーツマンシップに則り不正は許さん！ ほらほら、抗議の目を見る、オバハン」

3年生のお姉さまにキッと睨まれて周りの2年生女子たちはさつ

と視線を外した。

「まあまあ」

ポン、といっしょに来たお姉さんがにこやかに友人の肩を叩いた。
「いいじゃんヒロ！」。気分転換に来たようなもんだしさ。いっしょに列に並ぶのも楽しいじゃん

「しようがないなー。じゃね、瞬く～ん（ハート）。また後でね～」
怖いお姉さんも納得して列の後ろ（はるか先なんだよ～ん）に向かおうとした。

「こら待て」

「ゴリラさんが呼びかけた。

「今から並んだって整理券もらつだけで昼休みが終わっちまつぞ。
ほれ、クラスメートのよしみだ、取つとけ」

自分の生徒手帳にメモしてビリッと破き、渡した。『前キャプ命令ーこの女を放課後1番にすることー』。お姉さんは受け取るとニヤツと笑うと「サンキュー」とメモをヒラヒラさせて歩いていった。

「惚れてるな、男」

ミノコ＝実畠涼子（みのはたりょう）がキラリーンと目を光らせて言った。

「誰が？誰に？」

あたしはモグモグお弁当を食べながら訊いた。

「あのゴリラのキャプテンさんが今の3年女子によ

「ふう～ん」

モグモグ。

あたしはお弁当を食べ続ける。昼休みに至るまでもなく早弁を済ませてしまつているミノコはさつきから廊下に顔を覗かせてはいちいち戻ってきてあたしに報告してくれる。

「トロい！」

ビシッとあたしに指を突き立てる。モグモグ。ミノコは「はあ～」とがっくり肩を落とす。

「セイラ、あんたいつまでお弁当食べてんのよ？ 見てみ、もうあんた一人よ」

見渡せば、なるほど、あたし一人だ。じーーっとミノロに見つめられてあたしは慌てて残りのご飯をかき込んだ。

「じちそつさまでした」

「お粗末さまでした」

「あんたはあたしのお母さんか？」

あたしはえい！と手刀を振り下ろすかつこいつをした。

「この大ぼけコンビ」

と別の声がした。

「出た」

とミノロ。

「なにが出た、よ？」

腕を組んで美原仁美（みはらひとみ）＝通称ビジンさんが仁王立ちしていた。

・・この子も、クラスで一番の美人なんだけど、ちょっと浮いている（別に大金持ちのお嬢さんだつたりはしない）。

ビジンさんは色白の細面に大きな目でジロリとミノロを睨んだ。「さつきからなーに？菊池くんの周りをうるさく飛び回つて。あーあ、ピーチクパーチク、みつともないつたらないわね」

ピーチクパーチク・・。ミノロも負けない。

「あんたも素直に『瞬くん』って呼んだら？ あーあ、いじましいこいつで」

「うるさいわね！ わたしはその・・ちゃんと、その・・ラブラブになつてから・・」

真っ赤になつて最後の方は「ん〜〜？」とダンボの耳を近づけても聞き取れないほどか細い。まったくラブリーナ子だ。「えーい、うるさいうるさい！」と両手をバタバタ振り回した。「あなた！ミノロさん！」と指をビシッと突き立てた。

「敵前逃亡」とは見損なつたわ。オホホホ、あなたみたいな意氣地

のない方を好敵手と見ていた自分が恥ずかしいわ」

好敵手はライバルとは読まずこうてきしゅと読む。ビジンさんは昼メロというか、ちょっと大正ロマンが入っている。ルックス的にも夢一美人だ。

ところであたしたち三人を指してクラスでは「トリオ漫才」と称していることをビジンさんだけは感知していない。知つたら怒るだろうなあ～・・・、あたしはけつこう嬉しいんだけど。

「ぬあ・・・」

ミノコが大げさに怒つて言い返した。

「誰が敵前逃亡よー? あんたこそ、どうすんのよ?・・・」

「おほほほほ」

ビジンさんはおちよぼロでお上品に笑つた。怒れるミノコを横目に見て。

「あんな列になんて並ぶものですか。わたしは本氣で瞬くんが好きなの。最初つからファンの一人でいいなんていう自分をごまかすような場所にはいたくないの」

「なんだつてえー!!」

怒るミノコをそつちのけでビジンさんは「あらわたくしとしたことが、つい、シュンクン、だなんて・・・。ポツ」と赤くなっている。

「こひ、仁美」

ミノコはちよつと本氣で怒つてている。

「なんだよ、自分をごまかすって? ちゃんと好きだつて言つてるのに、何がごまかしてるんだよ?・・・」

ミノコは朝練から帰つてきた瞬くんに「はい!バレンタインデーのチョコーあたしの気持ち受け取つて!」とクラスメートの前で堂々とチョコレートの包みを差し出した。瞬くんは「ありがとう」と恥ずかしそうに受け取つていた。ミノコは「イッチバーン!」と頬を染めてブイサインを出していたが、・・・実は瞬くんは教室に帰つてくるまでに何人の女子からカバンいっぱいにチョコレートを渡されていたりするんだなあ・・・。その後も始業のチャイムが鳴るま

で数人の女子が瞬君にチョコを渡していた。休み時間中も。クラスの女子はほぼ全員渡しちゃったんじゃないかな？ ビジンさんとあたしを除いて……。

「おほほ・・。だつて、返事も話かずに一方的に渡して満足、なんて、最初っから彼女になるのをあきらめているようなものじやない？」

「そ、それは・・、だつて・・・」

ミノロ・・。

「わたしは違うわよ。1対1でしっかり告白して、ちゃんと菊池君の気持ちを確かめるんだから」

ビジンさんは冷たい目でミノロを見下してくる。ミノロは悔しそうにうつむいてる。おじおじ、仲良くしようよお～。

「あのね、ミノロ、ビジンさん。年に一度の楽しいイベントなんだからや、もつちゅうといつ・・女の子たちへ夢見る瞬分でこよつとおー」

「あんた!」

「あなた!」

一人同時に呼びかけ、

「は、はいい〜〜？」

一人は睨み合いつとその懇意に目を同時にあたしに向けた。

「セイラ

「セイラさんは、じうなのよつー?」

「あの〜、だからね、夢見る乙女の楽しいイベントを〜・・」

ああ、一人の恐い目はあたしを逃がしてくれない〜〜。ビジンさんが言つ。

「あなただって菊池くんが好きなんでしょ？ 違うとは言わせないわよ、その日に菊池君ラブつて書いてあるわー。わたしに彼を取られるのなんて嫌でしょ？ だったら正々堂々あなたもわたしと勝負なさい！ わたしの恋の好敵手として、彼女のような卑怯な真似は許さないわ！」

ミノンの目にカチーンと星が散る。

「誰が卑怯な真似よ！ と、それはこっちに。セイラ。あんたもイベントに参加しなよ。後悔するよ？」

「ううーん・・・あたしはねえ・・・」

弱つたなあ・・・笑つてこまかしても許してくれない。

「そりやあ瞬くん、好きだよ、憧れるよ。かつこいいもんね、女の子なら当然だよ。でも・・・なんていうかなあ・・・あたしはその・、いいよ」

「「よくない！」」

と、即座に二重奏が返つてくる。あたしはまた笑つてこまかす。「いやいやほんと。例えばさあ、あたしミノンもビジンさんも好きよ。一人のどつちかが瞬くんの彼女になるんだつたら、あたしはすつゞく嬉しいと思つけどなあー」

それは本当だ。そう思つよ、うん。・と、自分で確認する・。

「そう。それはありがとう。でもねー」

ビジンさんがホラーに微笑む。

「わたしはイ・ヤ・よ。もしこの女が菊池君の彼女になつたりしたら、顔に口紅で『テカテカ『ブス』つて書いてやるわ」

ビジンさんに挑戦的に嘲笑われてミノンも

「あたしだつてあんたのその細つこい天パー髪に噛んだガムをひつつけてやるわよ！」

「まあお下品ー！」

「美人だからつてなめるなよー、あんたなんか二十歳過ぎればただのふけ顔よー！」

「おいおい！」

やつぱり漫才になつてるよー。クラスメートたちの目が笑つてゐぞおー。

二人は息もぴつたりに「フンッ」とそっぽを向き合ひ、

「卑怯者」

「後で吠え面かきやがれ」

とあつちとそつちに行つちゃつた。

取り残されたあたしは・・・

「卑怯者・・かな?・・・」

と呴く。もちろん、あたしのことだ・・・。

ミノコは他の女子とおしゃべりを始め、ビジンさんは一人静かにハイネの詩集なんて広げている。

教室はエアダクトから温風が入つてきているけどドアは開きっぱなしで、廊下に並ぶ女の子たちの姿が見える。あつちの方が暖かそうだ。列の前方、瞬くんを見て、連れだつた友だち同士笑い合つてもその顔は緊張にガチガチで、それが女の子らしくて可愛らしい。列が前に動くたび、きつと胸をドキドキ高鳴らせていくんだねつ・・。

あたしもあの列に並んだら、もっと女の子らしくドキドキして、恋する楽しさを味わえるのかなあ?・・

こうして眺めているだけのあたしは一人の言つどおり「意氣地なしで敵前逃亡以前の卑怯者」で、最初から「諦めてるんだ」と自分を「まかしている。ああ、自己嫌悪。

二人は、本当に瞬くんが好きなんだ。

ビジンさん、言い過ぎだよ。ミノコだって本当に瞬くんが好きなんだ。

あの女の子たちだつて、卑怯者なんかじゃないよ。

そりやあみんな瞬くんの彼女になりたいに決まつてるよ。

でも、そういう幸運な彼女は一人きりなんだ。・・複数いたら困るよね。瞬くんはそんな人じゃありません!

どうかな? その幸運な彼女を、みんな恨むのかな? それとも

祝福する? 祝福できる?

きつとみんな泣くよ。自分が瞬くんを好きな気持ちに苦しんで、なんでこんなに好きになっちゃつたんだうつって後悔して。でも、泣いて泣いて、泣き尽くして、そうしたらきっとスッキリするよ。瞬くんを好きになった自分の気持ちがとっても愛おしくて、誇らし

くて、大切な宝物になるよ。きっとそんな自分が前より少し好きになるよ。

・・なーんて、最初からふられた気持ちを考えちゃってどうするんだ？ でも現実的にあそこに並んで恋する乙女の顔をしている少女たちは、みんな、そういう苦しみを体験することになるんだ・・・。

ミノコも泣くのかな・・・

ビジンさんも泣くんだろうな。あの子は本当に純粹でまっすぐな子だから。その涙がうれし涙だったら、わたしはきっとすぐ嬉しいと思う・・・ウン、思うよ・・・。

あたしはダメだね。あたしに泣く権利はない。こんな傍観者面して、自分の気持ちをじまかして。あたしの後悔は、すっごく後味の悪いものだろ？・・・。ああ、早くも自己嫌悪の泥沼。

しょうがないよね、

聖良則子（せいらのつこ）、乙女座9月1日生まれ、高校2年1
7歳、美術部員、

つて、誰にともなく自己紹介。ビジンちゃんほどではないけどそこそこかわいいとは思う。けど、美術部員だもんねえ～。こんな根暗な文系少女、スポーツ万能、サッカー全般、容姿端麗、学校中の女子の憧れを一身に集めるスーパー王子様が、・・あ・た・し・なんかねえ～～、と、つい演歌調になくなってしまうじゃないのよ。

あー、お茶らけている自分にまたしても自己嫌悪。桃色ハートのバレンタインデーが、なんでこんなにダークブルーなんだ？

あたし、バレンタインデーって、嫌い？

嘘つた。

ちやーんと、

カバンの中には手作りチョコの豪華箱詰めが入っているくせに・・・
美術部員だぞ、美的に、けつこう頑張って自信あるのになー・・・
あたしの、
バカ。

第2ハーフ

5分前の予鈴が鳴つた。

「うお～、菊池！急げ！あと20メートルだ！」

前主将さんの焦る声に列に並んだ女の子たちの顔も心配そうに曇る。「急げ！」って言われちゃあねえ、そりゃガツカリだ。

「こらこら、授業が始まるぞお！」

もう次の英語の先生が来ちゃった。

「先生！ 武士の情け！ どうか今しばらく猶予を～！」

「5、4、3・・・はい、」

無情に鳴り響くチャイムの音。うおおと吠えるゴリラ。

「アウト。ほらほら、さつさと散れ」

「先生え～。頼む！」

ああ、女の子たちの涙が見えるようだ・・。

「バーク。おまえらも、教師に叱られる覚悟があるなら勝手にしろ。ちなみにわたしのクラスの罰は・・バレンタインデーの論文でも提出してもらおうか、もちろん、英語でな」

はつはつはー、と高笑いを上げてイングリッシュティーチャーのミスター相沢が入ってきた。ちなみに、おでこがまぶしい。背後から「先生、ありがとー」とゴリラの吠える声が返ってきた。先生、今日のあなたは本当にまぶしい・・・保護者にばれたらまずいんじゃないかと思うけれど、いい学校だ。

5分後被害者の瞬くんが頭を下げながら入ってきて、

「後ろに立つとれー、この色男」

と怒られて教室に笑いが起こつた。後ろに立たされた瞬くんは黒板の例文を読まされて席に返された。論文の宿題は本当に出されるのかなー？

放課後になつた。

「おーい、菊池、始めるぞおー」

前主将さんが3年のお姉さんたちを引き連れてやつてきた。お姉さんたちの笑顔はピカピカだ。「瞬くーん」とハートマークをまき散らして華やかな声が呼びかける。廊下には整理券を握り、胸に大事にチヨコレー^トの包みを持った女の子たちが並び始めている。1年生の女子が多いようだ。2年生は昼休みのうちにだいたい渡し終わつたのだろう。1年生たちは恥ずかしそうにでも嬉しそうに初々しく桜色に頬を染めている。上級生に声をかけてチヨコ^トを手渡すのもかなり勇気がいるだろうし、彼女たちにとつてこの制度は良いかも知れない。

と、言う主人公たるあたしのモノローグは例によつてミノ^トのつポートを元にあたしの頭の中でワープロ打ちされていく。

前主将さんに呼ばれて瞬くんは「はーい」と返事をしながらカバンにあたふたと教科書やらなんやらを詰め替えてもたもたしながら廊下に向かつた。

！・・・・・

なんか・・・、チラッと・・・、あたしを見ていつたよつた氣がするけど・・・

気のせいだよね？

それともクラスの女子でチヨコ^トをあげてないのはあたしとビジンさんくらいのものだから、それでかな？ いやいや、瞬くんがそんなさもしい根性をしているとは思えない。

やっぱ氣のせいだね・・・、うん・・・。

ビジンさんはミノ^ト『フン』と顔を背けて廊下へ出でていった。あたしはミノ^ト「ねえ、ビジンさんと仲直りしなよ」と言った。ミノ^トは恥々恥々つに眉間にしわを寄せながら「するわよ。友だちだもん」と言った。ああ麗しきかな女の友情。トリオ漫才万歳！

「で、あんたはどうすんの？」

「あたし？ 今日も部活だよ」

「じゃなくってえー。チヨコ。入つてんでしょ？」

陰険な目つきであたしのカバンを指さした。・・バレバレだ。

ミノコは一タツと笑つて

「ビジンさんとこっしょに勝負してたらあ？」

と言つた。あたしは考へる。

「そんな勇氣ないよ」

「後悔するよ？」

「・・・・・」

「あ～あ、ほんとに後悔するよ。けっこ一脈ありだと思つただけど

なあーー」

「え？」

「瞬くんつてや」

ミノコはまじまじとあたしを見つめて言つた。

「案外みんなが思つているような人じゃないと思つただけどなー」「じゃあ・・、どういう人？」

「まあね~」

ミノコは意地悪く話をばぐらかせた。

「たださあ、勝手なイメージ押し付けられて、けっこ迷惑してん
じやないかと思つてや」

「・・・・・」

スポーツ万能でキラキラの王子様じゃない瞬くんつて、どんな男

の子なんだろう？・・とあたしは考へた・・

「あんた、瞬くんのどこが好き？」

「・・・・・」

「あたしささ、やっぱ王子様な感じがいいんだよね

あはははは、と軽やかに笑つた。

「けつこう迷惑なファンかもね？だから、あたしはただのファン
でいいんだ。ビジンさんの言つように楽な位置でさ、ただのファン
やつてるのだけ、楽しくていいじゃん？」

ミノコが本心でそう言つてこるのか分からぬ。でも、ミノコの

瞬くんを好きだつて気持ちは、やつぱり、本當なんじやないかな？

・・無理してない？ミノン・・。

ミノンは明るい笑顔で言つ。

「でも、やつぱりあんたはちやんと勝負してきなよ。でないと、本当に仲直りできないよ」

ビジンさん・・。列になんか並んでないよね？ きっと練習が終わるまで、ずっとグラウンドで待つているんだ・・。

「行け！ セイラ！ 出撃だ！ ライバルに先を越されるな！ 行つて、玉碎してこい！」

「玉碎しちゃダメじゃん」

あたしもようやく笑えた。ミノンは大まじめで言つ。

「土曜日に三人でカラオケに行くぞ。中島みゆきの『恨みます』を三人で歌うぞ！」

「歌いたくないって」

「じゃあ安室の『Can You Believe?』。安室を歌いたかつたら、どっちか『デートの約束取つて』。ただし土曜は予約済みだからね」

ミノンの頑張つて睨んでいる顔にあたしは笑顔で「分かった」と答えた。

「セイラ、行きます！」

「行つて来ーー！ 骨は拾つてやるぞー！」

なんかのパロディー（あたしこのアニメ知らないんだ）をやりながらあたしは教室を出た。

列はまだ続いていたけれど、終わりは見える。暇な3年生が2人交通整理をやつていて、瞬くん以外の現役部員たちはとっくに練習を始めているらしい。

あたしは瞬くんを振り返らず、『勝負！』とピンクの炎をメラメラ燃やしながら好敵手ビジンさんの元へ向かつ。

グラウンドに行くんだからまずは玄関で外履きに履き替えなくち

。せ

グラウンドに下りるわけじゃないんだから通学靴でいいんだよね」と下駄箱から靴を下ろして足を入れると、右足、爪先になんかつつかえた。

何かと虫を探ると、2つに折られた一枚のメモが入っていた。

「・・・・・」

その文面は、とうてい信じられないものだった・・・・・。

グラウンドにジンさんを見つけてあたしは歩いていった。

「ジンさん」

「セイワ。なに? 冷やかし?」

「勝負よ。あたしも瞬くんが好きなの」

「ありやつ」

ジンさんは嬉しそうにニヤリと笑った。

「じゃあ正々堂々と勝負。負けたって恨まないでね」

「そつちけんや」

あたしはジンさんのとなりに立つて仲良べグラウンドを見下ろした。うちの学校のグラウンドは周りが土手になつていて、向こうで野球部が、こっちでサッカー部が、あっちではラグビー部が、こっちの隅っこでは陸上部が、それぞれ元気に声を出して練習に励んでいる。厚いコートを着て震えている自分が恥ずかしいが・・

「ところどじんさん、そのかつこう・・」

ジンさんは黒のスタジアムジャンパーを着ている。背番号10。もちろん瞬くんの背番号。で、だぶだぶ。

「もしかしてそれって・・」

「もちろん、菊池くんへのプレゼントよ。毛糸のセーターとかマフラーが定番でしょうけれど、そんなありふれたものではわたしの本気の誠意は伝わらないわ!」

「ところどは、もしかして・・」

「当然、手作つよ。半年前からこの田のために準備してきたのよー。」

「そ、そなんだ・・」

あたしも昨日はけつこいつ氣合を入れて手作りチョコを作ったけれど、さすが、あたしとは氣合の入り方が違う。取りあえず今の時点での負けは認める。

実は、グラウンドの丘に立つのはわたしたち一人だけではない。20人くらいの女子がサッカー部の練習を見学していて、きっと彼女たちはもう瞬くんにチョコを渡しているのだろ。いや、瞬くん目当てとは限らないけれど、まあ、きっとそういうだろ。だつて・。みんなチョコの紙袋を堂々と持つビジンさんを冷たい目で睨んでいるもの。こんな寒空の下練習を見学しているくらいだもん、かなり本気の瞬くんラブ！の子たちだろ。自分たちも1対1で手渡したかったのも我慢して列に並んでプレゼントしたんだろ。ああ、わたしもカバンの中を取り出すのが怖い。それなのにビジンさんたら黒地に白字で「LOVE」とデカデカ書いた、ゴールドのリボンをかけた目立ちまくりのチョコ袋を堂々と抱えて、凛と立っている。あなたってほんと素敵だ。惚れちゃうよ。

あたしも覚悟を決めてビジンさんと同盟を組んでチョコ袋を取りだした。えーい、見ろ！美術部エース渾身の「飛び出すカード」付きの赤いハート型チョコボックスを！

ビジンさんはニヤリと笑つた。

「なかなかやるじゃない」

あたしもふつふつふーと不敵に笑い返す。

「ビジンさんこそ、そのジャケット、プレゼントするんだよね？瞬くんの練習が終わったら？ つてことはわー」

「・・・・・・」

さすがのビジンさんも真っ赤になつた。その様子が可愛らしくてあたしは意地悪に言つてやつた。

「ふうーーん。ビジンさんつたら、ダ・イ・タ・ン。わたしのぬくもりをあなたに着せてあげる~なんて」

「さ、寒いでしょ？ 汗をかいて急に冷やしたら風邪をひいてしま

うわ・・

最後の方は限りなくフロードアウト。頭から湯気が上がりますよ。あたしは笑って言った。

「バレンタインティーって楽しいね」

「そうね」

キャーと見学の女子たちから歓声が上がった。ようやく瞬くんが登場したのだ。現キヤプテン・・えーと、たしかC組の人・・に遅れたお詫びをして「よろしくお願ひします！」と元気に仲間たちの練習に加わった。

「瞬くーん！ 頑張つてえーーーー！」

周りから黄色い歓声が飛ぶ。瞬くんは気を取られることなく真剣にボールを追つて走り回る。華麗な脚さばき。かつこいいーーーー！

30分経ち、1時間経ち、辺りはすっかり夜の暗さになつてフィールドに照明が灯された。練習を見学していた女子たちはだいぶ減つたけどそれでもまだあたしたちの他に5人頑張っている。照明が灯されたのを見て名前不明のキャプテンが瞬くんを呼んだ。

「おまえもういいや。今日は上がり」

瞬くんは青天の霹靂（せいてんのへきれき）とキャプテンに抗議した。

「なんですか？俺、ちゃんと練習に集中しますよ？」

「あー、うつせー。俺が集中できねえんだよ」

キャプテンは乱暴に言つとあたしたちの方を見た・・・、見たのは、ビジンさん？

「バス2つ乗り継いで帰るんだろう？」

「誰が？」

「あー、うつせー。そりなんだよ！だから、こんな遅くなつたら・・心配じやねえかよ。いいから、てめえ、帰れ！」

乱暴に瞬くんのお尻をけつぼるキャプテンに周りの部員たちはひゅーひゅーと冷やかしの声をあげた。ははあ〜ん、みんな知つてんだ。あたしはニヤニヤしてビジンさんを見た。ビジンさんは・・緊張した（寒さでこわばつた？）顔でひたすら瞬くんを見つめている。お氣の毒なキャプテンさん。

瞬くんは不満ながら「お疲れでした。先失礼しまーす」と頭を下げて部室に向かつた。

ビクッとビジンさんが痙攣するみたいに飛び上がった。

「い・・いよいよね・・

ガツチガチに緊張しまくつている。これだけ緊張した人がとなりにいるところちは却つて落ち着いてしまう。あたしはずつと赤いチヨコボックスを持ったままだ。なんで1時間も抱えてなければなら

ないんだと思うけれど、ビジンさんがそうして包みを抱えているんだからしあうがない、お付き合いだ。あたしは耐えられず毛糸の手袋をしてくるけれど、ビジンさんは白い細い手にじかに包みを掴んでいる。いくら寒くたってじいつと掴んでいれば汗をかく。はた目にも黒い袋が汗で湿つていているのが分かる。本人は気付いてない。一
心に瞬くんを見つめ続けている。本当に瞬くんが好きなんだ。
あたしはさつき一ヤーヤしたことに自己嫌悪を感じた。あたしは二人の関係を打算的に、・・自分の都合のいいように、計算していた・・。

言わなくちゃ、ビジンさんに、あのことを。でないと、あたしは申し訳なくて彼女と友だちでいられない！・

「あのね、ビジンさん。実はあたしの下駄箱に・・

「来た！・・」

ビジンさんは失神しそうな声を上げた。口の話なんてまるつきり聞こえてない。ええへい、ままでー

「行くわよ！」「

あたしは周りの瞬くん親衛隊の冷たい視線を振り切るように、直してしまったビジンさんの腕をひつ掴んで、ズカズカ、部室から土手に上がる階段に向かつて歩いた。土手に上がった瞬くんがあたしたち一人を前に困惑した表情を浮かべた。あたしはバシンー！とビジンさんの背中を思い切り叩いた。「イタツ！」とビジンさんが飛び上がった。

「渡すわよ！ チョコー！」

あたしは言つてチョコボックスをズイと差し出した。我に返つたビジンさんも包みを差し出した。そうだ、あたしたちは正々堂々勝負するんだ！後悔しないために、友だちで居続けるために！・・・
そうだ、これではつきりする・・・

あたしはビジンさんが話すのを待つた。彼女に先に話す権利がある。

「あ、あ、あ、・・・あのー・・・

ビジンさんはガチガチ体を震わせて白い息を吐きながら一生懸命言つた。

「チョコ、受け取つてくだせー…………あ、あの、わ、わ、わ
た、わたし・・・

菊池くんが好きです！ わ・・・わたしひとつも合ひへくださこつ！
！・・・」

よく言つた！ あたしはビジンさんを肩でドンと押すよつて瞬く
んの正面に立つと思いつて言つた。

「あたしも瞬くんが好きです！ あたしひとつも合ひへくださこつ！
！・・・」

・・・・・やつぱり、真つ赤だ、あたし・・・。

ビジンさんがドン！とあたしの肩を押し返してくる。あたしたちは一人揃つてしまつすぐ瞬くんにチョコレートを差し出していく。

瞬くんは・・ひどく戸惑つている。すゞしく困つて、そして・・・

「ごめん。俺、好きな子がいるんだ・・・」

と・・・、言つた・・・・・・

グラッヒ、ビジンさんの体がまつすぐ後ろにひっくり返りそうになつて、あたしはびっくりして支えた。あたしはビジンさんの包みをひつたくると自分の箱といつしょに瞬くんに押し付けた。

「これ、食べて！ 一生懸命作ったから！ 食べてくれるよね！？」

瞬くんはあたしの剣幕に圧されて「うん・・・」とうなずいた。

「ほら、ビジンさん、瞬くんチョコ食べてくれるつひだ。よかつた
ね？」

「う・・・」

いきなりドン！と突き飛ばされた。「うわ！」とあたしは危うく
土手を転げ落ちしそうになつた。ビジンさんは「わあああ～～～ん」と大声で泣きながら走つていつた。

「ビジンセーーーん！・・・・・」

あたしも大声で呼びながら後を追つて走つた。親衛隊の女の子が
いい気味といつよつに薄笑いを浮かべていた。分かるよ、その気持

ち、ルール違反のあたしたちも悪いけど、でも、あんた、「さいいついだよっ！！！」

と叫んだときにはあたしはもう校舎を回っていて、彼女には聞こえなかつただろう。でも・・自分で分かつてるよね？ 瞬くんを好きつて気持ちは同じだもんね・・・。あたしは彼女の代わりに泣いてやつた。「わあわあ」と。あんたも後で泣きな！

ビジンさんは校舎の「」字の窪んだ角で、真つ暗な陰の中で、しゃがみ込んで泣いていた。

「ビジンさん、ねえ、ビジンさん」

あたしが泣き声で呼んで肩を揺するといきなり立ち上がりつてあたしをぎゅうっと強く抱擁してまた「わああああああああああ」と大声で泣いた。・・耳が痛い。

あたしも思いきり抱きしめ返してやつた。ビジンさんももつと強く抱きしめてきて、あたしも・・つて死ぬぞ、こらー！

あたしたちは女二人抱きしめ合つて大声で泣いた。

泣いて、泣いて・・

すつきりしたかい？・・

ビジンさんが落ち着いてきたのを見計らつてあたしは黙つていた秘密を告白した。

「あのね、実はね、あたしの下駄箱の中に入れていたんだ。『6時40分、C棟松の木で待つ。菊池』って・・・。バカだよねえあたし。瞬くんからじゃないかつて、舞い上がつちゃつて・・・えへへー、そんなわけないのにね？ 菊池違い？ 心当たりないなあ？ どうせ誰かのイタズラだよね？ 時間になつて待つてたらクラスのバカ男子が『やーい、引っかかるあー』なーんて、にくつたらしいこと言つて飛び出して来るんだよね？ あははは、そんな手に引っかかるもんですかーつてね」

「則子！」

「は、はーーー！」

ビジンさんにピシヤリと言われてあたしは思わず氣をつけの姿勢

を取つた。ビジンさんは恐い目であたしを睨み付けて言つた。

「まさか行かないわけじゃないでしょうね？」

「え？ イタズラに決まってるよ。あ、あたしもさ、もしかして…。
なーんて希望も…チラッと…持っちゃつたりしたけど…、でも…、もう…、はつきりしたじゃない？ あたしたち、ものの見事に玉砕しちゃつたじゃない？」

「わたしなり行く」

「え・・・・・・」

「菊池君が待つてゐるって言つてるのよ？ びつして行かないのよ？」「でも、もう、ふられちゃつたし…」

「菊池君は自分から告白するつもりでいたから、だからわたしと二人じゃ言えなかつたのよ」

「そ、そうなのかな？…」

「そうよ… 信じなさい！」

ビジンさんはあたしの肩を掴んで激しく揺さぶつた。目が真剣だ。あたしも、真剣に答えなくちゃ。

「菊池君に待ちぼつつけなんて喰らわせたらわたしが許さないんだから！ あなたなんか、絶交よ！… もし、本当に悪戯で誰かがあなたをからかうようなことをしたら、わたしがぶん殴つてやるわよ！…」

「…」

わたしはジーーン…とした。

ビジンさんは涙にふやけた顔を笑わせると、スタジヤンを脱いで、あたしに着させた。

「ビジンさん…、これ…」

「わたしの菊池君への思いが詰まつたジャンパーよ。お守りに着ていきなさい」

「ビジンさん…。あたし、ダルマ」

「コードの上から無理やり着させるんだもん。ビジンさんはブルッ
と震えて「あなたのコードよこしなさいよ」と言った。あたしはス
タジヤンとコードを脱ぐと、コードをビジンさんに渡して改めてス

タジャンを着た。ああ、ビジンさんのがくもつが。・・でかいぞ、
こひ。

「あのや、じれ、瞬くんにあげればいいの？」

「うーん・・とビジンさんは考えて、

「ダメ。あなたにあげる。わたしはもうあなたのお友だちモード
にチエングしたの」

「ありがとう。でもコートはあげないよ
だつて高かつたんだもん。

「ケチ」

「はいはい。わたしはビジンさんみたく心が広くありません」

あたしたちは微笑み合つた。

あたしはバス停までビジンさんを送つていって、時間を見て、約束の場所へ向かつた。

そこには、

瞬くんがいた。

「ほんとうに瞬くんだつたんだ・・・」

あたしは夢の中のようにふわふわして、全然実感が持てなかつた。
電灯の明かりの下、瞬くんも緊張したように青白い顔をしていた。

「ごめんな、さつき。美原さんに悪いことしちやつたな」

「うん。泣いてたよ、すつゞく」

「聞こえた。あんな大声で泣くなんて、びっくりした。あの後太田
が泣き出してたいへんだったんだぞ」

「ああ・・」

太田君だったつけ、C組のキャプテン君。

「あたしビジンさんとキャプテンさんが上手くいくといいなあーな
んて勝手に思つてた」

「実は俺も・・・自己嫌悪だよなー」

「うん・・」

・・なんか、瞬くんつても・・・

「ほれ、バレンタインマークのプレゼント」

「えつ！？」

瞬くんに3色チェックの紙袋を差し出されたたしは驚いた。

「瞬くんって、・・・女の子だったの？」

「バーク。バレンタインマークの本場つていえばヨーロッパだろ？」

あっちじや男女を問わずプレゼントし合つじやないか？」

「そうだね・・。えへへ、嬉しいなあ。開けてみていい？」

「うん」

瞬くんの頬を染めた顔にニヤつきながらあたしは袋を開けた。中には赤い包装紙に包まれたチョコレートの箱のような立方体が入っていた。

「これも？」

「うん」

あたしが包装紙をばがすと、中身がバラバラッとほぐれた。頭をちょこっと覗かせてきれいにラッピングされた・・チョコレートバー？

「食べるなよ」

「？」

よく見れば包装紙の内側に茶色く粉が散っている。これは・・

「コンテだ！」

絵のデッサンに使う鉛筆とクレヨンの中間のような画材だ。中身は同じコンテだけど、7本、7色の紙できれいに巻かれている。本当にチョコレートみたいだ。

「これ瞬くんが巻いたの？」

「うん」

「瞬くんつてけつじうこの女チックなんだね？」

「悪いがよ？」

「ううん。全然。大好き」

瞬くんは女の子のように赤くなつた。あたしは王子様の瞬くんが好きだ。でも、文系のあたしの思い描く王子様は必ずしもスポーツ

が出来なくたつていい。キラキラとかつじょべ、はにかんだ優しさ
が素敵なのだ。

「ありがとう」

あたしは嬉しくて素直にお礼を言った。

「うん」

瞬くんも嬉しそうにはにかんだ笑顔を浮かべた。

「でもさ、男子はホワイトティーでよかつたんじゃない？」

あたしが訊くと、

「だつてさ、聖良さん、なんか俺にチョコくれないような気がして
れ・・・」

瞬くんは氣弱そうに言った。こうこうの顔は、他の女子は知らない
だらうな。

そう思つたからこいつして自分でプレゼントを用意して、えーと・
朝のうち？それしかないよね？あたしの下駄箱にあのメモを忍ばせ
たんだ。

則子でいいよ（ハート）といつのはこずれ後のお楽しみに取つて
おいて。

「あたしだつてチョコあげたかったけど・・・ぜんぜん自信なかつ
たから。あたしで、いいのかな？」

「聖良さんが好きなんだ」

「うん・・・・・」

ミノロ、ビジンさん、ゴメンっ！・・・あたしは世界一幸せで有
頂天な女の子です！

「帰ろう。送つていいくよ」

「うん」

星が輝く。天の川まで見えそうだ。

「それ、美原さんが着ていたのだよな？」

「えへへー、いいでしょ？あげないよ~」

なんか本当に気に入っちゃった。土曜日のカラオケパーティーは

あたしが奢らなくちゃダメかなー？・・・

瞬くんが言つた。

「ホワイトマーのお返しは聖良さんの自画像でいいよ」

あたしだつてチョコあげてるぞ。

「じゃああたしはねーーー、今度の練習試合のハットトリックでいいよ」

「あ、そんな言葉知ってるんだ?」

「えへへー、付け焼き刃」

「上南は強いんだぞ?」

「愛の力を見せてください!」

「うーん・・・、頑張るか?」

「ファイト!」

あたしたちは笑つた。幸せだ。

練習試合、ミノコとビジンさんといつしょに応援に行こう。二人とも、来てくれるよね、きっと。

おわり。

P.K戦（後書き）

*軽いお詫のつもりが、かなり熱くなってしまった。あー、青春つていですね（わたしはまるつきり無縁でしたけど）。ありがとうございました。（2008・2・5）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814d/>

バレンタインデーラブソデー

2010年10月8日15時47分発行